# ◇　国　語

国 3－1～国 3－17 まで 17 ページあります。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(a)太宰治は、非常に［　ア　］的な内容をチャーミングな文章で描く人でした。だから、内容は破滅的だけれど、スタイリッシュで読みやすいのです。ここにも、一〇代から二〇代の若者が嵌っていく理由がありました。また、作品ごとにいろいろな試みもされています。例えば短編小説(b)『女生徒』は、若い女性の一人称で書かれています。

朝は、なんだか、しらじらしい。悲しいことが、たくさんたくさん胸に浮んで、やりきれない。いやだ、いやだ。朝の私は一ばん醜い。両方の脚が、くたくたに疲れて、そうして、もう、何もしたくない。熟睡していないせいかしら。朝は健康だなんて、あれは嘘。朝は灰色。いつもいつも同じ。一ばん虚無だ。朝の寝床の中で、私はいつも厭世的だ。いやになる。いろいろ醜い後悔ばっかり、いちどに、どっとかたまって胸をふさぎ、身悶えしちゃう。

（『女生徒』角川文庫、一七～一八ページ）

（中略）

さらに、戦時下の風俗をうまく切り取った有名な作品に(c)『トカトントン』があります。作品のタイトルに使われているオノマトペは、主人公が戦時中に働いていたグンジュ[A]工場の作業音で、戦後になっても彼の耳にはその音が充満していたのです。何か目標に向かって奮い立とうとしても、「トカトントン」の音が聞こえて虚無感に襲われるという主人公の物語です。

その時、実際ちかくの小屋から、トカトントンという釘打つ音が聞えたのです。この時の音は、私の幻聴ではなかったのです。海岸の佐々木さんの納屋で、事実、音高く釘を打ちはじめたのです。トカトントン、トントントカトン、とさかんに打ちます。私は身ぶるいして立ち上りました。

（『ヴィヨンの妻』新潮文庫、五五ページ）

このように太宰は、独特の言語センスを[B]クシして、絶望に打ちひしがれている世相を、ポップに描く手腕に長けていました。こうした太宰の〝軽さ〟が、食料難の中で暮らす市民にとって、非常に励みとなったわけです。太宰の作品から学ぶべきことは、「ど

んなに窮乏した状態に置かれても、世相や時の政権に対するぼやきの一つや二つ、あるいは呪いや笑いの一つや二つを口にする権利と余裕を保っておきたい」ということです。そうでなければ、人生は本当に辛く、困難になってしまいます。太宰もそうした声を、矢継ぎ早に発表する短編小説に書きなぐっていました。終戦の翌年に発表した『苦悩の年鑑』には次のような呟き(つぶや)が残されています。

東条の背後に何かあるのかと思ったら、格別のものもなかった。からっぽであった。怪談に似ている。（中略）
指導者は全部、無学であった。常識のレベルにさえ達していなかった。

（『グッド・バイ』新潮文庫、四〇～四二ページ）

固有名詞を変えれば、時の政権にそのまま適用できます。政治、経済、国家を［　イ　］に構えて論じる「大説」が嘘で固めた妄言に過ぎないことがわかったとき、人々は生活実感の中から立ち上がる「小説」の方を信用するようになりました。敗戦とともに国家神道も、大政翼賛体制も崩壊すると、「滅私奉公」とか「一億玉砕」といった戦時中のスローガンはとたんに死語になりましたが、いやというほど聞かされたそれらの言葉は戦後になっても、鎚音(つちおと)同様、耳をついて離れなかったでしょう。戦後七二年が経過し、戦争の記憶が風化してくるのと引き換えに登場した愚かな施政者たちが無責任かつ幼稚な妄言を繰り返していますが、こちらも「トカトントン」と聞こえます。

次に紹介するのは坂口安吾です。私は特にこの作家の(二)「権威を疑う」というスタンスに感じ入るところがあります。政治の大きなうねりの中において、文学者は無力な存在でしかありません。戦時中は、多くの文学者が国家に奉仕することを求められました。「国家のキキ[c]においては、人権の制限もやむなし」という国家総動員体制のもと、文士たちの表現は著しく制限されたわけです。しかし坂口安吾の言動は、戦中も戦後も不思議と首尾イッカン[b]していました。[d]谷崎潤一郎の章でも同じようなことを申し上げたと思いますが、彼らの態度は戦争による影響をほとんど受けていません。

それはおそらく、誰もが刻一刻と変わっていく戦局、あるいは政局に関心を払っている中、安吾は他人とは違ったものを見つめていたからです。では、安吾が見ていたものとは何か。それは、古代から現代に至るまで変わることのない、人間の本性と言うべきものです。

彼の書いた歴史作品『安吾史譚』を繙くと、天草四郎、柿本人麻呂、直江山城守（兼続）といった(二)歴史上の錚々たる人物を俎上に載せています。しかし、安吾の手にかかると、彼らは英雄などではなく、どこかおかしなところを持つ普通の人間になるのです。天草四郎を「頭の悪い熱血的テロ少年」、柿本人麻呂を「怠け者の無能力者のホラフキ」、直江兼続を「戦争マニアで戦略マニア」呼ばわりしています。これは、どれほどの人物であろうと、どれだけ時代が移ろうと、人間の本性はさほど変わらないという安吾の信念の表れだろうと思います。

安吾が興味を抱き続けたのは、「混乱の中で生き抜く人間の［　ウ　］」でした。国家などまったくあてにできない戦後の混乱期を生きる人々の強さであり、したたかさであり、あるいは楽観性――そうしたものに注目しました。

例えば戦後の闇市に出現した怪しい商売を取材したり、日本共産党に潜入取材したりと、ルポルタージュ文学の先がけのようなことを行ったのです。彼は戦後に流行った政治・風俗現象を緻密に取材し、「週刊誌連載風」の形態でレポートしていきました。高みから天下国家を論じるのではなく、戦争で傷ついた一人ひとりの人間が焼け跡でどのような生活をしているのかという、ミクロな世界にこそ焦点を当てる。このようなスタンスは文学の原点と言えます。

その安吾の代表作と言えば『堕落論』です。(三)私はこの『堕落論』を、戦後文学の必読書と考えます。この作品は、焼け跡となった地で生きていく日本人にとって、明日へと踏み出すための大いなる励ましとなったでしょう。ここで言う「堕落」とは、敗戦後の焼け野原に放り出され、国家をあてにすることもできなければ、助けを求める家族・知人もいない、完全なる孤立ムエン――つまり堕ちるところまで堕ちた状態を指しています。決して、「仕事もせずに借金ばかりするようなダメ人間になれ」と言っているわけではありません。

では、堕ちるところまで堕ちたときに、人間はどうなるのか。安吾は、「中途半端な堕落ではなく堕ちるところまで己を堕落させたときに、人間本来の姿がありありと見えてくる」と言います。

> 日本は負け、そして武士道は亡びたが、堕落という真実の母胎によって始めて人間が誕生したのだ。
>
> （『堕落論』新潮文庫、八四ページ）

そして安吾は、人間が堕落するのは当然で、それは戦争に負けたこととは関係ないと書いています。

人間。戦争がどんなすさまじい破壊と運命をもって向うにしても人間自体をどう為しうるものでもない。戦争は終った。特攻隊の勇士はすでに闇屋となり、未亡人はすでに新たな面影によって胸をふくらませているではないか。人間は変りはしない。ただ人間へ戻ってきたのだ。人間は堕落する。義士も聖女も堕落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は堕ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない。

戦争に負けたから堕ちるのではないのだ。人間だから堕ちるのであり、生きているから堕ちるだけだ。

（前掲書、八五ページ）

人はどん底まで落ちることで初めて、自分の「本性」を見据えることができるということです。では人間の本性とは何か。安吾は次のように書いています。

人間の、又人性の正しい姿とは何ぞや。欲するところを素直に欲し、厭な物を厭だと言う、要はただそれだけのことだ。好きなものを好きだという、好きな女を好きだという、大義名分だの、不義は御法度だの、義理人情というニセの着物をぬぎさり、赤裸々な心になろう、この赤裸々な姿を突きとめ見つめることが先ず人間の復活の第一の条件だ。そこから自分と、そして人性の、真実の誕生と、その発足が始められる。

（前掲書、九五～九六ページ）

人間は堕ちる道を堕ちきることによって、自分自身を発見できます。そして、自分自身を発見することによって初めて、人は救われるというのです。安吾の文学には、「堕ちるところまで堕ちたら、もう上がるしかない。政治に頼ることなく、他人を頼ることなく、自らを信じて生きていこうじゃないか」というメッセージが込められています。だからこそ、今も読む者の心を揺さぶるのです。

（島田雅彦『深読み日本文学』による）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　グンジュ

1
①自由をキョウジュする
②悲願をジョウジュする
③生活ヒツジュ品を買う
④勲章をジュヨされる
⑤女御としてジュダイする

B　クシ

2
①クモツをささげる
②クドクを積んだ僧
③クエキを課せられる
④害虫をクジョする
⑤石ザイクの職人

C　キキ

3
①ジョウキを逸した行動
②キトクに陥る
③キセキ的に助かった
④問題をキキャクする
⑤キビンに動く

D　イッカン

4
①トッカン工事を行う
②冷暖房をカンビする
③結末の演技がアッカンだった
④優勝旗をダッカンする
⑤避難カンコクを出す

E　ムエン

5
①会費をエンノウする
②セイエンを送る
③親類エンジャを頼る
④物事がエンカツに進む
⑤エンカク操作を行う

問二　空欄［ア］・［イ］・［ウ］に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

［ア］
①教訓　②抽象　③理知
④絶望　⑤幻想

［イ］
①大上段　②大乗壇　③大冗談
④大定団　⑤大丈断

［ウ］
①アイロニー　②デカダンス　③リアリズム
④パラダイム　⑤パラドックス

問三　傍線部（a）・（d）の作家が執筆した作品を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（a）太宰治
①『金閣寺』　②『地獄変』　③『斜陽』
④『暗夜行路』　⑤『高瀬舟』

（d）谷崎潤一郎
①『細雪』　②『伊豆の踊子』　③『たけくらべ』
④『浮雲』　⑤『舞姫』

［6］［7］［8］［9］［10］

問四　傍線部（b）『女生徒』・（c）『トカトントン』の、本文での引用箇所に関する説明としてふさわしくないものを、次の①～④の中から一つ選べ。　11

①どちらの文章でも、リフレインやオノマトペが用いられており、主人公の感覚を巧みに表現している。
②どちらの文章でも、主人公が抱く虚無感を当世風のしゃれた文章によって軽妙に表現している。
③どちらの文章でも、一人称の独白形式を取ることによって主人公の苦悩をリアルに表現している。
④どちらの文章でも、主人公の心象風景を描写する中で、政権への批判を遠回しに表現している。

問五　傍線部（一）「「権威を疑う」というスタンス」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。　12

①国家が掲げたスローガンを否定し、時の政権が抱える問題について概念的に論じようとしたということ。
②国家や政治に救いや価値を見出すことなく、したたかに生き抜く人間の強さに重きを置いたということ。
③国家の方針に迎合した文学活動を行いながらも、実は政治家たちの矛盾を鋭く見抜いていたということ。
④国家や政治の動きに翻弄されることなく、時代を追って変遷していく人間の本性に注目したということ。

問六　傍線部（二）「歴史上の錚々たる人物を俎上に載せています」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

①歴史上の人物のうち特にすぐれた者たちを取り上げ、その人物像を様々な面から批評しているということ。
②歴史上の人物のうち特に著名な者たちを取り上げ、その逸話を数多く引用しているということ。
③歴史上の人物のうち特に人気のある者たちを取り上げ、その生き様を辛辣に評価しているということ。
④歴史上の人物のうち特にカリスマ性のある者たちを取り上げ、その生涯を虚構化しているということ。

問七　傍線部（三）「私はこの『堕落論』を、戦後文学の必読書と考えます」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

①『堕落論』には、「堕ちるところまで堕ちた時に、自分が真に望んでいたものが見えてくる」という希望の道が示されているから。
②『堕落論』には、「戦争に負けたから堕ちるのではなく、この世の生物は皆堕ちるのだ」という普遍的な真理が指摘されているから。
③『堕落論』には、「堕ちるのは抗えない運命であるから、怠惰な自分を嘆く必要はない」という自己肯定の方法が示唆されているから。
④『堕落論』には、「とことんまで堕落することによって、初めて人間の無力さが理解できる」という哲学的な思想が見られるから。

問八　本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。　15

①坂口安吾は、戦後の混乱期を生きる人々の姿に注目し、様々な現場に赴いて詳細な取材を行った。さらに、鳥瞰（ちょうかん）的な視野をもって日本における政治の理想とは何かを論じ続けた。

②太宰治も坂口安吾も、物資に乏しく困窮状態にある世の中の有り様に注目して作品を執筆した。それらは当時の人々の励みとなり、政局にも大きな影響を及ぼした。

③戦中に政府が掲げたスローガンは国のために個の犠牲を強いるものが多く、戦後すぐに使用されなくなった。しかし、それらは当時の人々の脳裏から容易に消えなかった。

④太宰治は、いかに困窮した状態でも世相や政権に対するぼやき・呪い・笑いなどを述べる余裕を持ちたいというメッセージを随筆の中に表現し続けた。

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

この世のありさまを理解し、私たち人間の由来するところをよりその深層においてとらえ、深く隠された新たな真実を明らかにしようとする人間の営為。そのような知的志向性のことを、ここでは「アカデミズム」と呼ぼう。

「アカデミズム」という言葉は、古代ギリシャにおいてプラトンがアテネ郊外に設立した学問の殿堂、「アカデミア」に由来する。爾来、西洋における学問はその雛形から大きな影響を受けつつ発展してきた。

アカデミズムは、今後どのように展開していくのだろうか？　知がインターネット上に拡散し、次第に万人が無料で（自由に）共有するものになってきている今日、「大学」とか、「学会」といった組織においてアカデミズムを定義するのは不適切になってきている。

私自身は、アカデミズムを、「圧倒的な知の卓越」への志向としてとらえる。そのようにしてはじめて、より［ア］な、高い知を求める人類の凄まじいまでの情熱、その無限運動の本質を指し示すことができるのではないかと考える。

美貌、富、名誉。およそこの世において、人々の欲望をかきたて、憧れをカンキ[A]するものは多くある。人は、正しいことよりも、自らが望むことをなそうとする。人の道にかなったことがなされる時でさえ、それは、「正しいことを行う」ということ自体が欲望の対象になった結果であることがしばしばである。

人がアカデミズムに憧れるのは、必ずしも立身出世を図ろうとしてのことではないだろう。知を自らのものにする喜び、人類がこれまで蓄積してきた叡智の上に、さらに自分なりのささやかな貢献をなしたいという願いの切なさは、万物の霊長たる人間という存在の根底にかかわる心理的機微である。

すぐれた知性を持つことほど、魅力的で「セクシー」なことがあるだろうか？「美は皮膚だけの深さしかない」と英語のことわざにいう。何事も見かけだけが優先されがちな現代ではあるが、知の卓越は、目に見えないからこそ、もしそれが本物であるならば人々を魅惑し、心を動かす力を未だ持っていると信じたい。

オリンピック競技会などにおいては賞品が与えられるのに、知に対しては何も与えられないのはなぜか？　ご褒美は、その対象になる行為よりも価値が高いものでなければならない。この世で、知ほど価値のあるものはないから、それに対して賞を与え

ることはできない。これが、プラトンの著作の中に残された古代ギリシャ人の考え方である。今でも、心ある人はアカデミズムに対して密かにそのような畏敬の念を抱いているのではないか。

日本では、一九八〇年代の「ニューアカデミズム」のブーム、バブル経済の狂乱を通して、知の意味が相対化され、真面目なタンキュウが、時には「ネクラ」などと揶揄の対象とさえなった。結果として「知のデフレ」現象が進行し、「わかりやすさ」の競争が行われた結果、コウハの本が売れにくくなった。今日においても、マスコミに流通している情報の質から見て、またいわゆる「売れ筋の本」の傾向から測る限り、日本の社会は未だにバブル期に前後した「知の崩壊」の後遺症から脱却していないようにも見える。

しかし、長い人類の歴史から見れば、近年の日本の傾向など、ごく短い時期の徒花に過ぎない。人間の脳が本来快楽主義的にできていることを考慮すれば、また、プラトンが『饗宴』の中でカッシャしたように「真実を知ること」が人間の最も根強い願望であり快楽であることを考えれば、［イ］な知への志向が日本においてこのままずっとやせ衰えたままでいるとは考えにくい。

実際、インターネットが無限の学びの可能性を開くに従って、知の卓越への志向が、再び復活しつつあるように思われる。少なくとも、私自身と、私の周辺においてはそうである。新しい情報環境が開いた無限の世界の中で、知が、再びその強靭さを取り戻すべき時が来たようである。

近未来におけるアカデミズムの本質について一度考察しておくことは大切なことに違いない。

アカデミズムの本質とは何か？　それが、専門領域に分かれた蛸壺的な世界認識であってよいはずがない。自分の専門のことはよく知っているが、他のことには疎い。それでは、「圧倒的な知の卓越」とはとても言えないし、何よりも人々の心を惹きつけない。

今や、インターネットの発達によって、誰でも手軽に最先端の専門論文が読める時代である。ある分野における専門家は、下手をすれば優秀な検索エンジンによって置き換えられてしまいかねない。先端的な知のあり方は、時代によって変わる。古今東西のあらゆる知が蓄積され、検索可能になっていく。そのような新しい情報環境の出現した現代における知を考えるためには、

新しい革袋を用意しなければならない。大学の迷いと自己タンキュウ、インテリたちのとまどい、グランド・セオリーの消失。そして今、その復活への胎動。全ては連動し合った一つの現象であろう。

アカデミズムの本質とは何かを考える上で、私には忘れられない光景がある。かつて留学していたケンブリッジ大学において見た学者たちの姿である。

ケンブリッジ大学やオックスフォード大学は「カレッジ」と呼ばれる単位から構成される。ケンブリッジの数々のカレッジの中でも、トリニティ・カレッジはかつてかのアイザック・ニュートンも在籍し、今までに三〇名余りのノーベル賞学者が輩出した名門である。

各カレッジには、「フェロー」と呼ばれる上級構成員だけがつくことのできる「ハイ・テーブル」と呼ばれる特別な食卓があるのが通例である。トリニティにも立派なハイ・テーブルがあり、食事をとりながら行われている議論を垣間見る機会が何回かあった。ハイ・テーブルにおける研究者たちの姿は、アカデミズムにおける圧倒的な知の卓越というものが本来どんな姿をしているのか、まざまざと見せつけるものであった。

（中略）

議論が始まると、それはもはや(三)通り一遍のものではなかった。お互いに相手の専門性は尊重しつつも、容赦なく切り込んでいく。日本における「学際」というものが往々にして意味するような、手ぬるい建前の交歓ではない。まるで、地上はるか上空で行われる戦闘機どうしの「ドッグ・ファイト」を見ているかのような(四)丁々発止のやりとり。誰も、「自分の専門はこれこれだから」と言い訳などしないし、専門外のことに口出しをするなと文句を言う者もいない。

（中略）

どんな問題についても、それなりの意義のある発言をすることができる。そのような「倫理」を実践するためには、深い専門性の裏付けと、広汎な知識、そして柔軟で強靭な思考力が必要とされる。他流試合をし続けることはしんどいことかもしれないが、アカデミズムとは、本来そのような姿をしていたのであろう。

自分の専門に近い人が、隣にはいない。そのようなトリニティ・カレッジのハイ・テーブルにおける多様性のあり方は、「同じ種類の樹木を探そうとすると、遠くまで行かなければならない」熱帯雨林の様子を思い起こさせる。

そもそも、アカデミズムとは、多様性の中にこそ花咲くものではなかったか。この世界の(五)森羅万象を、単一の方法論だけでとらえきれるはずがない。他流試合の積み重ねの中で鍛えられる強靭な精神こそが、アカデミズムの［ウ］産出物ではないか。

単一の専門性の中に立て籠(こ)もってしまうことは、知性にとってはもちろん、より広い視点からの人間の精神性においても、［エ］な失策となる。

（中略）

思えばアカデミズムの本分とは、多様な「知」の花が咲く野を全速力で疾走することなのではないか。その中で、ただ単に諸学を蹴散らし、食い散らかしてしまうのではなく、やがて一つのはっきりとした形をとった統一へとまとめ上げることを志向する。そのために、多様な要素を集めてぎゅっと凝縮する。さまざまな彩りの知が集まってリンカイ(E)点に達した時、そこから未だ見たことがないような洞察の光が放たれる。

この世に驚嘆すべき新しい知が現れる時には、必ず、多様性の高度な凝縮がある。創造性は一般的な生命原理の一部分である。生物が交配を通して進化するように、人間が生み出す知もまた、異なる要素が凝集することによって先へと進む。

しかも、知の融合は、生物の交配とは違い、さまざまな［オ］制約から自由なのである。

（茂木健一郎『疾走する精神』による）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　カンキ

①カンゲンに乗せられる　②証人をカンモンする
③病気がカンチする　④カンマツの付録
⑤間違いをカンカする

16

B　タンキュウ

①ジャングルをタンケンする　②タンセイを込める
③トタンの苦しみ　④自宅をタンポに借金する
⑤カンタン相照らす仲

17

C　コウハ

①コウキの乱れ　②コウケツな志
③都市のコウハイ　④コウナンを併せ持つ
⑤良いコウキが漂う

18

D　カッシャ

①生物をシャセイする　②シャウンをかける
③シャフツ消毒する　④女子寮のシャカン
⑤敵がシャテイ距離に入る

19

E　リンカイ

①カイキを延長する　②他国がカイニュウする
③戦争をカイヒする　④カイキ祝いをする
⑤ゲカイを見おろす

20

問二　空欄［ア］・［イ］・［ウ］・［エ］・［オ］に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

［ア］
①横断的　②運命的　③包括的　④限定的　⑤相対的

［イ］
①本格的　②事務的　③恣意的　④短絡的　⑤慢性的

［ウ］
①野心的　②連動的　③類型的　④形式的　⑤本来的

［エ］
①結果的　②致命的　③経験的　④感覚的　⑤実証的

［オ］
①総合的　②習慣的　③象徴的　④物理的　⑤求心的

［21］　［22］　［23］　［24］　［25］

問三　傍線部（一）・（二）・（三）・（四）・（五）の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（一）畏敬

①敬う振りをして遠ざかること　②恐れおののくこと
③心から服し敬うこと　④力を見せつけておどすこと

26

（二）揶揄

①からかうこと　②さげすむこと
③ふざけること　④おもねること

27

（三）通り一遍

①ひと通りすべてのこと　②うわべの形だけであること
③たった一度のこと　④避けて通ること

28

（四）丁々発止

①たびたび中止するさま　②激しく打ち合うさま
③軽やかに振る舞うさま　④賭(か)け事に興じるさま

29

（五）森羅万象

①森の中に生きる動植物　②科学では理解できない不思議なもの
③宇宙に存在するすべてのもの　④想像を絶する怖ろしいもの

30

問四　本文の内容と主旨が同じものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。　31 ・ 32

①古代ギリシャ人によれば、知に対して賞品が与えられないのは、人類の発展にどれだけ貢献できるのか、すぐには判断できないからである。

②古代ギリシャ人によれば、知に対して賞品が与えられないのは、どんな褒美よりも知の方が価値が高いからである。

③古代ギリシャ人によれば、知に対して賞品が与えられないのは、内容が難解で多くの人に理解しにくいものだからである。

④インターネットの発達は「大学」や「学会」といった狭い世界を否定することにつながっている。

⑤インターネットの発達は無限の学びの可能性を広げ、新たな知へのタンキュウが始まろうとしている。

⑥インターネットの発達はアカデミズムの本質を塗り替えてしまう可能性をはらんでいる。